

## 1 音 素 か 2 音 素 か ?

—〔ʃʹtʃʹ〕〔zʹdʒʹ〕の〔ʃʹ〕〔zʹ〕への移行—

城 田 俊

§ 1. 形能素中で〔ʃʹtʃʹ〕という音はすたれ、〔ʃʹ〕が有力になりつつあるとしても、〔ʃʹtʃʹ〕はいまだ標準語の中に生きています。<sup>(1)</sup> 生きているというだけでは、まだ、不十分で、дождь《雨》の〔dóʃʹtʃʹ〕という発音は、ロシア語の標準語の資格を十分持つレニングラードの標準語で、いまだ「正しい」発音として推薦されています。<sup>(2)</sup>

この〔ʃʹtʃʹ〕の先行部分の〔ʃʹ〕は、/ʃ/ という音素が〔tʃʹ〕という軟子音の前で同化してとった姿であり、〔ʃʹtʃʹ〕という子音のつらなり全体は /ʃ/ という音素と /tʃʹ/ という音素の結合のあらわれの姿であると解釈することができます。

§ 2. 〔ʃʹtʃʹ〕という発音を持つ人の中には、ユーモアと共に皮肉な響なしとはしない「いにしえのペテルスブルグの人達」とレフォルマーツキーに呼ばれるにしろ、дождя を〔dazʹdʒʹá〕と発音して、〔ʃʹtʃʹ〕に〔zʹdʒʹ〕を対応させる人がおります。

この〔zʹdʒʹ〕という子音のつらなりは、〔ʃʹtʃʹ〕のように、2音素の結合として、簡単に説明することはできません。なぜなら、先行部分の〔zʹ〕は /z/ にあたるとしても、後行部分の〔dʒʹ〕は、有声噪子音の前以外では無声の発現を持つ /tʃʹ/ によっては説明できないのです。

これを、あえて、/tʃʹ/ で説明しようとすれば、ロシア語の中に、普通採用されている、後行するものをもって先行するものを説明するという説明方式の中に、/tʃʹ/ という音素に限り、〔z〕の後では有声化して〔dʒʹ〕としてあらわれるという、先行するものをもって後行するものを説明する所の例外的な説明方式を、/tʃʹ/ という音素の特殊な行動の注記と共に、導き入れなければなりません。(そうすると、後行部分の〔dʒʹ〕の有声的性質は、先行部分 /z/ によって説明され、先行部分の〔z〕の軟音的性質は、後行部分 /tʃʹ/ によって説明されるという相互依存的な関係がここにみとめられることになります。)

後から前を説明する「後から前への同化則」(それは、現行の書法形式でい

えば、右から左を説明するので、「右から左への同化則」といってもよいと思います）が君臨する中で、「前から後への同化則」（「左から右への同化則」）の例外的存在を認めなければならないという事態は、他の言語の中にも見出されます。例えば、チェコ語では、子音の無声・有声の発現は、ロシア語と同じように、普通、後行するものによって先行するものが説明されますが、ř に関しては、そのような面を持ちながらも（例、lékařský 《医事の》の無声の[ř]）、př, tř, kř のようなつらなりでは、先行するものによってその無声的性質は説明されます（例、přiroda 《自然》, tři 《3》, křičet 《叫ぶ》等の無声の[ř]）

このような例外的規則による説明は、学問上認められないというのでは決してありません。他のものより、事態をよく、かつ、簡明に説明するなら、それは説明としての価値を十分有し、規則として認められます。しかし、チェコ語の ř に関しては、p, t, k 等のさまざまな無声子音の後で、無音化して現れるという一般化があるのに対し、ロシア語の [z'd͡z'] に関し、上にあげた説明をとるなら、その規則は /t͡ʃ/, それも /z/ だけの後の /t͡ʃ/, という個別的な例外規則となります。

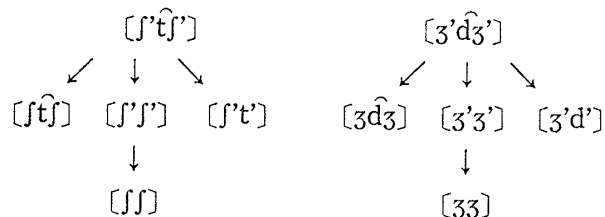
例外的であるにしろ同化則（結合規則）だけを1つふやし、子音音素の構成<sup>(4)</sup>には手をふれずに残しておくという、以上のような説明方法と共に、同化則はそのまま残し、音素を1つふやして事態を説明する方法があり得ます。この方法に従えば、ロシア語の中に /t͡ʃ/ とならんで /d͡z/ という有声の破擦音素があり、[z'd͡z'] は /z/ + /d͡z/ によって説明されるということになります。しかし、この説明もあまりうまくありません。というのは、/d͡z/ は /z/ の後にしかあらわれない、という風に、/d͡z/ に限り、分布の特殊性を認めなければならないからです。

§ 3. дождя́ が [daʒ'z'á], дождь が [dɔʃ'ʃ'] と発音される、モスクワの標準語においても、このような事態は、たとえ様相を異にするにしろ、残ることになります。

[daʒ'z'á] の [z'z'] は音素 /z'z'/, [dɔʃ'ʃ'] の [ʃ'ʃ'] は音素 /ʃ'ʃ'/ にあたるというのが、才能ある学者を擁するモスクワ音韻学派の説であり、この説は、革命後の標準ロシア語の中でのモスクワ標準語の勢力の拡大と、学派の精力的活動とに支えられて、定説化しつつあるようです。<sup>(5)</sup>しかし、この説は、2セグメントにわたって発現する<sup>(6)</sup>ばかりでなく、分布が著しくことなる<sup>(7)</sup>例外的音素を認めなければならないという点で、あまりすっきりしない面を持ちます。しかし、これら（§2, §3であげたもの）以外に、より、適切な説明方法は見出

されません。単音素によっても、その結合則によってもスッキリとした説明ができないものが、何で、他のものによってスッキリ説明がつくのでしょうか。音素及びその結合則こそ複雑な音声事象の最も簡明な説明方法なのですから。

§ 4. アヴァネーソフは問題の子音のつらなりのもとになる音声を、 $[\text{ʃ}^{\wedge}\text{tʃ}^{\wedge}]$   $[\text{ʒ}^{\wedge}\text{dʒ}^{\wedge}]$  に求め、両者の変化のみちすじと、その対応の様子を次のような図によって示しています。<sup>(8)</sup>



実際上は、上のような整然とした対応が必ずあるわけではありません。標準語の範囲内でも、「いにしへのペテルスブルグの人達」では  $[\text{ʃ}^{\wedge}\text{tʃ}^{\wedge}]$  と  $[\text{ʒ}^{\wedge}\text{dʒ}^{\wedge}]$  が対応し、モスクワ標準語の正音法では  $[\text{ʃ}^{\wedge}\text{ʃ}^{\wedge}]$  が  $[\text{ʒ}^{\wedge}\text{ʒ}^{\wedge}]$  に対応する筈ですが、レニングラードでは、 $[\text{ʃ}^{\wedge}\text{tʃ}^{\wedge}]$  が  $[\text{ʒ}^{\wedge}\text{ʒ}^{\wedge}]$  に対応したり、 $[\text{ʃ}^{\wedge}\text{tʃ}^{\wedge}]$  が  $[\text{ʒʒ}]$  に対応したりするロシア語を持つ人が多数見出されますし、モスクワの標準語を話す人々の多くは  $[\text{ʃ}^{\wedge}\text{ʃ}^{\wedge}]$  を  $[\text{ʒʒ}]$  で対応させています (§ 16 参照)。

このような不均衡な対応は、有声子音は、調音上、閉鎖（破裂）が弱く、その要素を早く失い、 $[\text{ʒ}^{\wedge}\text{dʒ}^{\wedge}]$  の  $[\text{ʒ}^{\wedge}\text{ʒ}^{\wedge}]$  への移行は、 $[\text{ʃ}^{\wedge}\text{tʃ}^{\wedge}]$  の  $[\text{ʃ}^{\wedge}\text{ʃ}^{\wedge}]$  への移行を「追越す」<sup>(9)</sup> ことからおこる、という達見をアヴァネーソフは披露していますが、なぜ、 $[\text{ʒ}^{\wedge}\text{dʒ}^{\wedge}]$ 、それに次いで、 $[\text{ʃ}^{\wedge}\text{tʃ}^{\wedge}]$  が閉鎖の要素を失うかは説明していません。すべての有声破擦音は、遅かれ早かれ、閉鎖の要素を失って、摩擦音に転化するわけではとうていありません。 $[\text{ʒ}^{\wedge}\text{dʒ}^{\wedge}]$  という子音のつらなりも、もし必要なら、閉鎖の要素を強固に保存した筈ですし、 $[\text{ʃ}^{\wedge}\text{tʃ}^{\wedge}]$  も、また、同様です。もし、 $[\text{ʒ}^{\wedge}\text{dʒ}^{\wedge}]$  が  $[\text{ʒ}^{\wedge}\text{ʒ}^{\wedge}]$ 、 $[\text{ʃ}^{\wedge}\text{tʃ}^{\wedge}]$  が  $[\text{ʃ}^{\wedge}\text{ʃ}^{\wedge}]$  になるなら、それなりの音韻論上、ないし、構造上、機能上の要因がある筈です。

§ 5. 今、形態素中で  $[\text{ʃ}^{\wedge}\text{tʃ}^{\wedge}]$  という子音のつらなりのある標準的ロシア語を、(共時的に) 考察することにします。

そのようなロシア語では、 $[\text{tʃ}^{\wedge}]$  という子音の前に、次のような12種類の子音が存在します。

$[\text{p}]$  :  $[\text{kóptʃ}^{\wedge}\text{ʲik}]$  ко́пчик «尾骶骨», ко́бчик «こちょうげん»,  $[\text{f}]$  :  $[\text{łóftʃ}^{\wedge}\text{ʲi}]$  лóвче «より巧妙に»,  $[\text{m}]$  :  $[\text{m}^{\wedge}\text{tʃ}^{\wedge}\text{ʲátstʃ}^{\wedge}\text{sə}]$  мча́ться «疾走する»,  $[\text{n}^{\wedge}]$  :  $[\text{kón}^{\wedge}\text{tʃ}^{\wedge}\text{ʲik}]$  ко́нчик «さき»,  $[\text{l}]$  :  $[\text{val}^{\wedge}\text{tʃ}^{\wedge}\text{ʲók}]$  волчо́к «こま»,  $[\text{ʃ}^{\wedge}]$  :  $[\text{ʃ}^{\wedge}\text{tʃ}^{\wedge}\text{ʲi}]$

щи «キャベツスープ», [tʃʹ]: [l'ótʃʹtʃʹik] лётчик «飛行士», [r]: [vartʃʹátʹ] ([varʹtʃʹátʹ]) ворчать «ぶつぶつ云う», [k]: [n'iktʃʹómnij] никчёмный «ろくでなし», [x]: [l'éxtʃʹi] легче «より簡単な」<sup>100</sup>。

ここで気附かれるのは [tʃʹ] の前で、前口蓋・摩擦・(無声)・子音が、[ʃʹ] という軟子音の姿をとっていることです。

次に、前口蓋・摩擦・(無声)・子音を先行部分とする結合をすべて調べあげることにします。

[ʃa]: [s'p'ijá] спешá «急ぎながら», [ʃ]#: [nój] нож «ナイフ», [ʃp]: [ʃpát] шпат «閃光鉾石», [ʃpʹ]: [ʃpíl'kə] шпíлька «ピン», [ʃv]: [ʃv'ir'átʹ] швырять «投げる», [ʃvʹ]: [ʃv'ějkə] швёйка «お針女», [ʃm]: [ʃm'ignútʹ] шмыгнуть «早く動かす», [ʃmʹ]: [pláʃm'á] плашмá «平面に», [ʃt]: [kaʃtán] каштáн «くり», [ʃtʹ]: [ʃt'íʹ] штíль «無風状態」(外来語), [ʃs]: [baíʃsə] бо́йшься<боя́ться «恐れる», [ʃsʹ]: [baíʃs'ə] бо́йшься<боя́ться «恐れる», [ʃn]: [stráʃnij] стра́шный «恐しい», [ʃnʹ]: [kl'íʃn'á] клешня́ «はさみ», [ʃl]: [paʃlá] пошла́<пойти́ «行», [ʃlʹ]: [paʃl'í] пошли́<пойти́ «行く», [ʃts]: [míʃtsə] мы́шца «筋肉», [ʃʃ]: [raʃʃítij] расш́итый «縫目をとかれた», [ʃʹtʃʹ]: [mójʹtʃʹnij] мо́щный «力強い», [ʃr]: [ʃrám] шрам «かたなきず», [ʃrʹ]: [ʃr'íft] шрифт «活字», [ʃj]: [ʃjót] шьёт<шить «縫う», [ʃk]: [nójkə] но́жка «あし», [ʃx]: [ʃxúnə] шху́на «スクーター」<sup>101</sup>

ここで確認しておきたいのは、前口蓋・摩擦・(無声)・音はいかなる子音の前でも [ʃ] という姿をとりながら、<sup>102</sup> [tʃʹ] の前では [ʃʹ] という姿をとることです。

[tʃʹ] の前では軟子音としてあらわれるが、それ以外の音の前では決して軟子音の姿をとらないというのが、位置にたつ子音としての /ʃ/ の立居・振舞 <sup>たちい ふるまい</sup> comportement (Martinet, 70) の大きな特徴の1つであり、また、前にたつ /ʃ/ を軟化させて発現させるのが [tʃʹ] の位置としての大きな特徴である、これが、以上の観察で導きだされる結論です。

§ 6. ロシア語において、母音 [o] の前ではすべての子音が円唇化されますが、この「同化」はロシア人に「知覚されない」<sup>103</sup> 子音の変容です。それに対し、к окну [k-aknú] «窓の方へ」、к дому [g-dómu] «家の方へ」というような、無声・有声の特徴における同化や、сон [son] «夢」、во сне [va-s'n'é] «夢で」のような、硬音的性質(非口蓋化的性質)・軟音的性質(口蓋化

的性質)の同化は、ロシア人には「知覚され得る」<sup>14)</sup>子音の変容です。子音の円唇化は、ロシア人には「知覚されない」が、有声化・無声化、硬化・軟化は、ロシア人に「知覚される」のは、前者は、ロシア語子音体系において *relevant*, *релева́нтный* である特徴における変容ではなく<sup>15)</sup>、後者は、*relevant* な特徴における変容であることに直接関連するわけですが<sup>16)</sup>、ここで、「知覚される」「されない」という心理的事実に関する議論は、さしひかえなければならぬでしょう。ただ、 $[\text{ʃ}^{\text{tj}}]$  にあらわれる  $[\text{ʃ}]$  の軟音的性質は、たとえ意味を区別する機能をその位置で発揮していなくとも、ロシア語を所有する人達には十分気附かれる音声的特徴であることを確認しておけば十分です。

§ 7. ある記号が常に他の記号に附随して現れる場合、その記号は独立した記号たり得ません。これは記号体系がもつ重要な性質の一つです。

前口蓋・摩擦・(無声)・子音が  $[\text{tj}^{\text{t}}]$  と結合する時、必ず  $[\text{ʃ}]$  という姿をとり、他の子音と結合する時は、必ず  $[\text{ʃ}]$  という姿をとるということになれば、 $[\text{ʃ}]$  は、後続するものは  $[\text{tj}^{\text{t}}]$  であることを直接予告し、 $[\text{tj}^{\text{t}}]$  は  $[\text{ʃ}]$  の単なる随伴者となり、記号体系上、独立する記号の機能を失います。この点、 $[\text{ʃ}^{\text{tj}}]$  の  $[\text{ʃ}]$  は、 $[\text{ptj}^{\text{t}}]$   $[\text{n}^{\text{tj}}]$   $[\text{ktj}^{\text{t}}]$ ……等の  $[\text{p}]$   $[\text{n}^{\text{t}}]$   $[\text{k}]$ ……と著しくことなり、 $[\text{p}]$   $[\text{n}^{\text{t}}]$   $[\text{k}]$  等は後続する単位(子音、母音、#)の個別的総体を何ら予告しませんが、 $[\text{ʃ}]$  は後続するものは  $[\text{tj}^{\text{t}}]$  であることを直接的に予告します。

かくして、 $[\text{ʃ}^{\text{tj}}]$  は2重の性格を持つことになります。

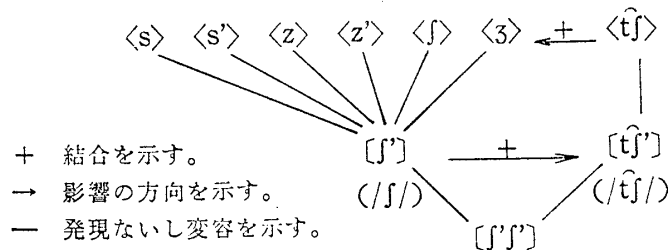
(1) 2音素の結合である。 $/\text{ʃ}/ + / \text{tj}^{\text{t}}/$  という2音素の結合であり、それ相当の長さを持つ。

(2) 1単位である。後行部分の  $[\text{tj}^{\text{t}}]$  は、すでに、先行部分の  $[\text{ʃ}]$  によって、その総体が伝えられており、何ら「不定の程度」を持たず、新しい情報は担えない。 $[\text{tj}^{\text{t}}]$  は  $[\text{ʃ}]$  の「ささえ」或は「つなぎ」のごとき役をを担うだけとなり、記号体系上、両者あわせて一単位の機能しか持たない。

つまり、 $[\text{ʃ}^{\text{tj}}]$  は「長さ」において2つの単位の結合と考えられながらも、「機能」としては、2つの単位の結合ではなく、1つの単位と化しているのです。

ここで注意しておかなければならないのは、 $[\text{ʃ}^{\text{tj}}]$  という子音のつながりは、 $[\text{ʒ}^{\text{dʒ}}]$  とはことなり (§ 13 参照)、以前のロシア語によって歴史的に与えられているばかりでなく、その発生機構を当該ロシア語の中に共時的に持ち続けていることです。 $[\text{ʃ}^{\text{tj}}]$  の発生機構とは、結合してゆく音素<sup>17)</sup>の水準で云えば、 $/\text{ʃ}/ + / \text{tj}^{\text{t}}/$  ですが、交替してゆく音素<sup>18)</sup>の水準で云うと、やや複雑な機構

で、それは、おおよそ、次の図のように示されます。



例、<s>+<tʃ>: переносить «移動する», перенос «移転», -чик «…者»; перенос[ʃʲʲʲ]ик «伝播者」—перенос[ʃʲʲ]ик。<z>+<tʃ>: рассказать «語る», рассказ «お話し», -чик «…者»; рассказ[ʃʲʲʲ]ик «語り手」—расска[ʃʲʲ]-ик。<ʃ>+<tʃ>: веснушек <веснушки «そばかす», -чатый; весну[ʃʲʲʲ]-атый «そばかすのある」—весну[ʃʲʲ]атый。<ʒ>+<tʃ>: перебежать «投降する», перебежек <перебежка «投降», -чик «…者»; перебе[ʃʲʲʲ]ик «投降者」—перебе[ʃʲʲ]ик。

[ʃʲʲʲ]の二重の性格は、通時的に由来するだけでなく、共時的にあり、それを生み出す内的機構を共時的に保有するがゆえに、[ʃʲʲʲ]は初元的な生命力を持つのです。

§ 8. いかに、それが逆説的であるにしろ、[ʃʲ]の後にあるのは必ず[tʃʲ]であるというなら、[ʃʲʲ]は[tʃʲ]である必要はなくなり、極端に云うなら、[ʃʲʲ]は1セグメントを占めていれば必要に応じて、他のいかなるものに転化してもかまわないということになります。[ʃʲʲʲ]が閉鎖の要素を失って、[ʃʲʲ]になる基本的条件はここに 있습니다。

もし、「言語が不必要なものから自由になることをたえず求める」<sup>199</sup>なら、[ʃʲʲʲ]は調音の複雑化こそまねくが、何ら弁別にあずからない閉鎖の要素を捨て去ることは理解できる変化の筋道です。[ʃʲʲʲ]は閉鎖の要素を失っても、他とは一致せず、それは自身であり得るのです。(それに対し、例えば[sts]という子音のつらなりが、閉鎖の要素を失えば、[ss]と一致してしまい、自分自身ではなくなります。cf. [kastśá] косца <косец «草刈人», [kássə] касса «金庫」。)

また、もし、「言語が必要なものをきわだたせることをたえず求める」<sup>200</sup>なら、[ʃʲʲʲ]にとり、先行要素[ʃʲ]の前口蓋性、摩擦性、(無声性)とならんで、軟音性が重要ですから、それが、後行部分によって繰返される[ʃʲʲ]という構成にむかうのは当然考えられます。(ここに[ʃʲʲ]の2セグメント性の保存の

原因の1つがあります。)

19世紀末、20世紀初頭のモスクワ標準語では、すでに、形態素中で [ʃʲʃʲ] が大勢をしめ、唯一の標準的発音として、当時のロシア語研究者に記述されるまで拡大しました。

§ 9. [ʃʲtʲʲ] の [ʃʲʃʲ] への転化は、その要因が共時的にあるが故に、通時的にもあらわれたわけですが、問題の多様性は、転化の要因及び機構が共時的に保たれ続けた点にあります。長子音音素を認めず、現行の音素の構成で<sup>24</sup> [ʃʲʃʲ] を解釈するとなれば、どうしても、/ʃ/ は [tʲʲ] の前で [ʃʲ] としてあらわれ、[tʲʲ] (/tʲʲ/) は、形態素間間隙 (#) に邪魔されなければ、前にある [ʃʲ] に同化して [ʃʲ] となり、/ʃ/+/tʲʲ/ は [ʃʲʃʲ] としてあらわれるという規則を現代語の中に認めなければなりません<sup>25</sup>。([ʃʲ] → [tʲʲ]) → [ʃʲʃʲ] という現象は、6頁の例で示したように、形態素の接合にあたってははっきりと見られ、音声学的にも、また、すでに述べたように、音韻論的にも了解できるものであり、上掲のような規規化は自然なことと思います。

[ʃʲtʲʲ] の [ʃʲʃʲ] への転化は共時的な変容である共に、通時的な変化であり、通時的な変化は、目前で共時的に再演され続けています。ロシアを代表するたべものщнの現代語の発音は [ʃʲʃʲʲ] ですが、それは、歴史的に [ʃʲtʲʲʲ] としてあたえられたというばかりでなく、共時的にも /ʃ/+/tʲʲ/+/i/ によってあたえられるのです。

このような事態の基本的条件を、ロシア語が持つにいたったのは、前口蓋・摩擦・(無声)・音が [tʲʲ] の前以外の全ての位置で硬化を完了した時でありましょう。もし、機能的な一単位化を音素化というなら、その時に [ʃʲtʲʲ] は音素化を開始し、かつ、閉鎖の要素を不必要なものとして振切りだし、共時的にも、通時的にも、[ʃʲtʲʲ] は [ʃʲʃʲ] になるという移行を開始したことになります。

§10. 筆者は [ʃʲtʲʲ] に関する予備調査で、[ʃʲtʲʲ] は、ロシア語音素体系とその結合則の矛盾の結節点であり、最も弱い環であることを、次のようなその特殊性をあげながら指摘しました。

(1) ロシア語の単音素は結合して2音素結合をつくるが、その場合、例えば、[tp] が [db], [tk] が [dg] に対応するように、多くが無声・有聲で対応し、互いに支えあうが、[tʲʲ] 及び [ts] [x] を後行要素とする結合は、有聲の対応者を持たない。(2) [tʲʲ] を後行要素とする結合は、また、対応する硬子音結合を持たない。(3) [tʲʲ] の前には12種類の子音しかたらず (§5 参照)、それ

は最も強い限定がおかれている位置である。前にたつ子音が最小の数であるということは、結合が自由ではなく、慣用句化する危険性をはらんでいることを示す。慣用句化とは、自由結合ではなく、複数の単位の結合でありながら一単位化することである。(4) このうち [ʃʹtʃʹ] という結合の、テキストにおける出現量の多さ、ひいては機能負担量の多さは特筆に価する。(5) [ʃʹtʃʹ] の [ʃʹ] という音には 6 <音素> が集中している (6 頁図参照)。6 音素集中はロシア語で非常に稀である。ここでは 1 つの形式 ([ʃʹ]) の中に多くの内容 (6 <音素>) が入れ込まれ、形式の単一さと内容の豊富さとが激しく矛盾する<sup>24</sup>。

以上は、[ʃʹtʃʹ] という子音のつらなりの特殊性と、内包する矛盾であります。これらは、[ʃʹtʃʹ] の 1 単位化とか、[ʃʹʃʹ] への変化とかを助けた条件ではありますが、その直接の原因ではありません。直接の原因は、[ʃʹ] による [tʃʹ] 総体の予告という体系上の矛盾にあると考えられます。

§11. [ʒʹdʒʹ] という子音のつらなりは、ロシア語の音声組織の中の古き住人です。その軟硬の性質にはやや問題はあっても、古代ロシア語の中にすでに存在していました。(жч, また жг も、これを示したといわれます<sup>24</sup>。)ですから、現代語について述べるこの場では、その発生を論ずる必要はないでしょう。[ʒʹdʒʹ] はロシア語の中にあったものとして認めなければなりません。

§12. [ʒʹdʒʹ] という有声子音のつらなりを、(共時的に) 考察してみましょう。

前口蓋・摩擦・(有声)・子音はいかなる位置においても硬子音 [ʒ] としてあらわれます。

[ʒa] : [draʒá] дрожа́ < дрожа́ть «震える», [ʒb] : [ʒban] жбан «蓋付きつぼ», [ʒbʹ] : [lʌʒbʹínə] ложби́на «隘路», [ʒv] : [ʒvátʃʹkə] жва́чка «はんすう», [ʒm] : [ʒmú] жму́ < жать «にぎる», [ʒmʹ] : [ʒmʹóʃ] жмёшь < жать, [ʒd] : [vraʒdá] вражда́ «敵意», [ʒdʹ] : [ʒdʹí] жди́ «待て», [ʒn] : [daróʒnɪj] доро́жный «道のり», [ʒnʹ] : [ʒnʹot] жнёт́ < жать «刈り入れる», [ʒlʹ] : [véʒlʹivɪj] ве́жливый «ていねいな», [ʒʒ] : [ʒʒok] сжѐг < сжечь «焼く», [ʒr] : [ʒrátʹ] жрать «喰う», [ʒrʹ] : [ʒrʹí] жри́ < жрать «喰う», [ʒj] : [ruʒjó] ружьё «鉄砲», [ʒg] : [ʒgú] жгу́ < жечь «焼く», [ʒgʹ] : [ʒgʹí] жги́ < жечь

それに対して、[dʒʹ] という音の前で、それは軟子音 [ʒʹ] としてあらわれます。例、[daʒʹdʒʹá] дождя́。

かくして、[ʒʹdʒʹ] に関しても、[ʃʹtʃʹ] に関して §6 から §8 で述べたこと



すべてがあてはまり、[3'] は後行する [d3'] を予告し、[3'd3'] は合体して、記号体系上一単位を形成し、後行部分を必要に応じて単純化する基本的条件を獲得します。

§13. しかし、[3'd3'] は [ʃ'tʃ'] とことなる面を持ちます。

まず、これは [ʃ'tʃ'] とことなり、§2 で述べた様に、単純に 2 音素結合として解釈することはできません。[ʃ'tʃ'] は、それを生産する機構を持つのに対し、[3'd3'] はそれを持ちません。[3'd3'] という子音のつらなりは、ロシア語の内部で共時的に生み出されるのではなく、以前のロシア語から受継いだものであります。[ʃ'tʃ'] を持つ語に比べ、[3'd3'] を持つ語は僅少であり、大約18語<sup>24</sup>を算えるにとどまるのはそれに起因します。

§14. なぜ、共時的な生産機構を持たない子音のつらなりが、ロシア語の中に保存されたのでしょうか。

すでに、予備的調査で指摘したように、ロシア語では、単音素の水準で、無特徴的である無声子音が、有特徴である有声子音に量的に優越し、その優越は、2 音素結合の水準で、増大します。それと同じような事情は、同じく無特徴的である硬子音と、有特徴である軟子音との関係で、或程度、見出されます。もし、ロシア語の噪子音の体系は、無声・有声、硬・軟の対応に支えられるのが、その構造原則であるなら、2 音素結合の水準において、有特徴的である有声子音結合と軟子音結合の存在に対する構造上の要請は、単音素の水準にもまして、高まっているとみななければなりません。(詳しくは城田)。その要請に対し、有声軟子音として答えているのが [3'd3'] であります。ですから [3'd3'] の存在への要請は子音体系の構造の中にすでにあり、[3'd3'] は 2 子音結合のあきまをうめるかたちで存在します。

一方、[ʃ'tʃ'] は 2 音素結合でありながら、1 音素と同じ機能をころころならずも獲得して、「亜音素化」し、共時的にあるというより、どんどんと 生み出される時、[3'd3'] はそれを構造的に支える有声の対応者（無声音素に対応する有声音素）の役割を獲得し、体系の中にそれなりの確固とした場所を見出します。(ロシア語の中に、有声子音の対応のないやもめの無声子音—/x//ts//tʃ'/—はあるが、無声子音の対応のないやもめの有声子音はないことから考えれば、[3'd3'] が存在し得たのは、常に [ʃ'tʃ'] に対応し、それを支えながらも、それに支えられていたためでしょう。)

[3'd3'] を ([3'3']) にしても) 保とうとする力には、勿論、語源意識というものも働いているに違いありません。しかし、単一の文字も統一的綴りもなく、

単音素の結合としても単純に解釈されないえたいのしれなな不確かな存在であるものを保とうとした力のもとにはこのような構造上の要請があったと考えられます。

§15. [ʒ'dʒ'] にとり、後行部分 [dʒ'] の閉鎖の要素は、調音の複雑化をまねくだけで、弁別機能上特に必要というものではない；前行部分 [ʒ'] の有声性、軟子音性は、前口蓋性、摩擦性と共に重要であり、後行部分は閉鎖の要素をすてさり、先行部分の前口蓋・摩擦・有声・軟子音性をくりかえして補強する構成にむかう；かくして、[ʒ'dʒ'] から [ʒ'ʒ'] への移行が共時的にも、通時的にもおこる；ということは [ʃ'tʃ'], [ʃ'ʃ'] に関して述べたことと同様です。

[ʒ'dʒ'] は、[ʒ'ʒ'] に通時的にも移ってゆき、例えば19世紀末—20世紀初頭のモスクワ標準語では広汎に広まりました。もし、その移行の速度が [ʃ'tʃ'] の [ʃ'ʃ'] への移行の速度より早かったとすれば、それにはアヴァネーソフの云うような原因 (§4 参照) も考えられますが、また、[ʒ'dʒ'] は以前のロシア語から一定量受継がれただけなのに対し、[ʃ'tʃ'] は生みだされていくため、変化の流れに乗ることが遅れるという事情も関係しているよう思われます。

§16. 現代語で、[ʃ'ʃ'] は、19世紀末—20世紀初頭のロシア語にも増して、[ʃ'tʃ'] を圧進し、子音体系の中に強固に居坐るのに対し、[ʒ'ʒ'] は、[ʒʒ] によって圧迫され、現代語の子音体系から追出されてゆくようです。このことは、以前から云われていましたが、<sup>24</sup> 比較的最近の大規模な調査では、統計的に明らかにされております。

この調査の報告者バーリノヴァが（恐らくパノーフの指導によって）あげる [ʒ'ʒ'] 消失の原因は、次の4点に要約されます。

(1) 音韻論的原因——「長子音性」は、ロシア語において、弁別に資さない剰余であり、それを持つ「音素」〈ʒ'ʒ〉は、子音体系の中で全く孤立した存在である。その上、〈ʒ'ʒ〉を持つ語は僅少である。

(2) 綴字の影響——[ʒ'ʒ'] は一定の文字を持ず、зж, жж, жд という綴りで示されてきたが、新たに出現した伝統を持たない識字層は、それを硬子音として読み、発音していく。

(3) 文法的子音交替の再解釈——〈zd'〉/〈ʒ'ʒ〉（例：〈jezd'-im〉—〈jeʒ'ʒ'-u〉）, 〈zg〉/〈ʒ'ʒ〉（例：〈brizg-al〉—〈briz'ʒ'-u〉）という特異な子音交替が, сердить—сержý, двíгать—двíжy 等にみられる 〈d'〉/〈ʒ〉, 〈g〉/〈ʒ〉という普通の子音交替として解釈しなおされ、その中に組込まれてゆく。〈jezd'-im〉—〈jeʒʒ-u〉, 〈brizg-al〉—〈brizʒ-u〉

(4) 方言の影響。<sup>28)</sup>

このうち、(2)(3)(4)は、事態を促進した要因ではありますが、決定的な原因でなく、決定的な原因は(1)である筈ですが、バーリノヴァが云うようでは、子音組織における [ʃʲ] の強腰の居坐りは説明できません。それを持つ語がいくら多いといっても、「音素」〈ʃʲ〉は、やはり、「音素」〈ʒʲ〉と同じく長子音であり、孤立している点はまったく同じです。筆者は、[ʃʲ] の居坐りと [ʒʲ] の追放の原因を次のように考えたいと思います。

すでに説いたように、[ʃʲ] は [ʃʲtʲ] と同価であり、[ʃʲtʲ] の [ʃʲ] への変化は、通時的のみならず、共時的にある変化です。ですから、現代語には [ʃʲtʲ] ~ [ʃʲ] というかわり音関係を認めることができます。[ʃʲ] は [ʃʲtʲ] から生れ、[ʃʲtʲ] に戻り得、共に /ʃ/ + /tʲ/ と解釈され、共に、その「発音上のバリエーション」<sup>29)</sup>として存在します。かくして、[ʃʲ] は [st] が /s/ + /t/ であると同じように、現に存在する2つの単音素 /ʃ/、/tʲ/ の結合として了解され、結合組織の中の正統的な存在と認められます。

それに対して、[ʒʲ] は、すでに述べたように、単音素の結合としては了解されません。単音素の結合でなければ、1つの音素ということになりますが、1つの音素とするとその長子音として発現する性質は特異すぎます。[ʒʲ] は音素体系の構造に、長子音という不安定な要素を入れ、その整合的安定を乱す邪魔物です。しかも、このような、体系を乱す邪魔物的存在は、量的に僅少な形態素によって担われているに過ぎません。それを似ている他のもので置換えても、体系にとっての利は多いにしろ、混乱はとるにたりません。[ʒʲ] を追放し、そのあきまを [ʒʒ] でうめるという事態は、[ʃʲ] が /ʃ/ + /tʲ/ と解釈されることにより、[ʒʲ] がパートナーを喪失し、体系を乱し、構造に不安定な要素を入れる存在として浮上る；構造の力学はそのような要素を除き、体系に安定をもたらそうとする；そのうごきは、綴字からも、文法からも、方言の影響からも、支えられる；ということから惹起されていると考えられます。

すでに、論の進め方は透明になってきたと思いますので、結論めいたことを書いておきます。

[ʃʲtʲ] も [ʃʲ] も2音素結合にあたり、かつ、1音素にあたる。[ʒʲdʒʲ] も [ʒʲ] も2音素結合ではなく、[ʃʲtʲ] [ʃʲ] の持つ1音素という側面に対応して存在する1音素のあらわれである。この長子音に発現する音素は消えさりつつある。

モスクワ音韻学派が行う /ʃʲ//ʒʲ/ という音素の承認に反対し、[ʃʲtʲ] と

いう発音に忠誠をつくし、その2音素性をあくまで守ろうと努めるレニングラードの学者の態度はそれなりに尊敬に価するものですが、[3'3']を単に[33] (/3/+3/)の発音上のバリエーションとしてかたづけるとしたら、それはレニングラード標準発音への固執的態度や反対の執拗さとかんこさに似合わない、簡略的な見方であり、モスクワの学者の反論をまともに受止めるには十分でないものがあるよう思われます。

§17. [ʃ] は [tʃ] そのものを予告し、[3'] は [dʒ] そのものを予告することを述べましたが、これと同じ現象が他の子音結合にも見られるでしょうか。もう紙数もつきかけましたが、この問題を検討せずに、本稿を閉じるとすれば片手落ちになるでしょう。

(1) /tʃ/ はいかなる硬子音の前でも、音声的に軟音的性質を保在します。

[tʃ'm] : [kartʃ'má] корчма «居酒屋», [tʃ'v] : [pótʃ'və] почва «土壌», [tʃ'k] : [pótʃ'kə] почка «つぼみ», [tʃ'x] : [tʃ'xát'] чхатъ «くしゃみする», [tʃ't] : [pótʃ'tə] почта «郵便», [tʃ'ts] : [valtʃ'tsá] волчца < волчѐц «あざみ», [dʒ'b] : [aldʒ'bá] алчба «どんらん」。

しかし、[ʃ] の前では、普通、[tʃ] という風に無声・硬子音の姿をとってあらわれます。

[pr'iv'etʃʃij] привѐдший < превесті «連れ来る」<sup>91)</sup>。

よって、[tʃ] は後行する [ʃ] を予告するように思われます。

(2) /tʃ/ は [3] の前では [dʒ] という有声・硬子音の姿をとってあらわれます。

[ódʒʒil] ѓѐжил < ѓѐжѐть «生き通す」<sup>92)</sup>。

よって、[dʒ] は後行する [3] を予告するということになります。

しかし、これら語を [tʃʃ] [dʒ] とする発音は、早いテンポの発話でおこることで、努めた発音では、[t] + [ʃ], [d] + [3] のように発音される点<sup>93)</sup>からいっても、また、これらが [tʃʃ] [dʒ] と発音されるとしても、その子音のつらなりは、形態素中には見出されず、みな、形態素接合部に分布し、形態素間間隙(＃')に区切られている点からいっても、形態素中に広汎に分布する [ʃ'tʃ], [3'dʒ] と同列に論ずることはできません。[tʃʃ] [dʒʒ] は、云ってみれば、[tʃ] #' [ʃ], [dʒ] #' [3] という結合なのです。ですから [tʃ], [dʒ] は子音 [ʃ], [3] を予告するというより、#' [ʃ], #' [3] を予告している、つまり、形態素の間隙 #' を示す記号となっているということになります。

ただし、#' によって区切られているとは考えられない [tʃʃ] の例が лѐчше

とその一族の語 (лучший, улучшение, улучшить 等) に見られます。このことは, [tʃʃ] が例外的にしる形態素中に侵入することを示すものですが, これらの語は, はなしことばで, [lútʃʃ'tʃ'i] と発音されます。<sup>84</sup> この事実は, 示唆的で, [tʃʃ] という子音のつらなりを形態素中から排除しようとするきせいが働いていることを示しています。

そのきせいは, [tʃ] を間隙記号としてとっておこうとする志向を示すものに外なりません。[tʃ] が間隙記号として働く限り, [tʃʃ] の「亜音素化」は前途遼遠といわざるを得ません。

註(1) 統計資料は Баринова (a) 46—47.

(2) しかし, [ʃʃ] を発音する人は, レニングラードでも年々少なくなります。Баринова (a) 25, 脚注参照。

(3) Реформатский 1651.

(4) / p, p', b, b', f, f', v, v', m, m', t, t', d, d', s, s', z, z', ts, n, n', l, l', j, ʒ, tʃ, r, r', j, k, k', g, g', x /. /k'//g'/(/x'/) に問題がありますが, 本稿には関係しません。

(5) レフォルマーツキーは「音素 /ʒʒ'/」という論文を「/ʒʒ'/ 万才」で結んでいます。

(6) これはトゥルベツコイの単音素認定の第3則に反します。しかし, 第3則はあまり重要でない, と彼自身が述べています (Grundzüge 53. Основы 65—66)。もし, ネウストупニーのいう単音素分割における「不均衡齟齬表」をつくるとすると, 音素 /ʃʃ'//ʒʒ'/ は「単音素の長さをこえない連絡」という項に?があてられることになります (Neustupný 参照)。

(7) 「音素」/ʃʃ'/ は, 母音, # 以外には [n] [n'] [k] [k'] の前にしかあらわれず, /ʒʒ'/ は, 母音以外には [ʃ] の前にしかあらわれないということになります。

例, [ʃʃ'u]: [ʃʃ'úkə] щúка, [ʃʃ] #: [v'éʃʃ] вещь, [ʃʃ'n]: [móʃʃ'nɨ] мóщный, [ʃʃ'n']: [x'íʃʃ'n'ík] хíщник, [ʃʃ'k]: [barʃʃ'ká] борщкá < борщóк < борщ, [ʃʃ'k']: [barʃʃ'k'é] борщкé < борщóк. [ʒʒ'i]: [dróʒʒ'i] дрóжжи, [ʒʒ'ʃ]: [daʒʒ'ʃ'ívɨ] дождлívый.

(8) Аванесов (a) 330.

(9) Аванесов (a) 330—331.

(10) [tʃʃ'] の前に [t] [s] [ts] はありません。嗓子音 abstruent 中, diffuse な音は, grave, acute において区別されません。

(11) [ʃf] [ʃf'] の可能性は推定されますが, 適当な例証はありません。

(12) [d'] [n'] [ʃ] の前で /ʃ//ʒ/ を軟化させる人がいます: [nas'm'éʃ'n'ík] нас-мешник. (Шахматов 106, Аванесов (b) 92, Isačenko 128)。しかし, これは, 正音法からは排撃されます (Аванесов (b) 92)。個人的な現象であるにしろ, このようなロシア語では [ʃ'tʃ'] の一単位化はおこりません (後述)。[j] の前で /ʃ//ʒ/ は半軟音としてあらわれることがあります (Isačenko 128)。

- (13) «не осознается говорящими» (Касаткин 56).
- (14) «может осознаваться говорящими» (Касаткин 56).
- (15) シャウミャーンの用語をかりて云えば, 円唇的性質は дифферентор として発現していないということになります (Шаумян 53).
- (16) 無声・有声, 硬・軟の対応は, ロシア語の音声体系における structural “genius” 構造的「精神」(Sapir 120) の如きものであり, それは, 特に, 嗓子音体系の組織原理のように働きます (城田 105 f).
- (17) 普通の意味での音素。パノーフのいう синтагмо-фонема (Панов).
- (18) アヴァネーソフのいう音素列 фонемный ряд (Аванесов (с)). パノーフのいう парадигмо-фонема (Панов).
- (19) Paul Passy, Etudes sur les changements phonétiques et leurs caractères généraux. のマルチネによる要約の1部 (Martinet 43).
- (20) 同上。
- (21) (4)参照。
- (22) これは, 前のものが後のものを調音方法において同化するという, 前から後への同化則であり, ロシア語の同化則の中の唯一の例外をなします (§2 参照)。
- (23) 詳しくは城田 115—123.
- (24) Jakobson 247—253.
- (25) Реформатский 1655.
- (26) 例えば, Аванесов 98. Гвоздев 80.
- (27) 詳しくは Баринова (а) (в)
- (28) Баринов (в) 91—102.
- (29) Буланин 84.
- (30) §6 参照。
- (31) Аванесов (в) 106.
- (32) 同上。
- (33) 同上。
- (34) 同上。

#### 参 考 文 献

- Аванесов Р. И., (а) О долгих шипящих в русском языке, «Доклады и сообщения филологического факультета МГУ», 1948, вып. 6. Реформатский А. А., «Из истории отечественной фонологии», М., 1970, 326—335 に再録。  
 (в) Русское литературное произношение, М., 1954. (с) Фонетика современного русского литературного языка, М., 1956.
- Баринова Г. А., (а) О произношении [Ж'] и [Ш'], «Развитие фонетики современного русского языка», М., 1966, 25—54. (в) Судьба слабых членов консонантной системы, «Фонетика современного русского литературного языка», глава VI. 81—99, 101—102. Русский язык и советское общество,

IV. M., 1968.

Борунова С. Н., Сочетания [ш'ч'] и [ш'] на границах морфем, «Развитие фонетики современного русского языка», М., 1966, 55–71.

Буланин Л. Л., Фонетика современного русского языка, М., 1970.

Гвоздев А. Н., Современный русский литературный язык, ч. I. М., 1967.

Зиндер Л. Р., Фонематическая сущность долгого палатализованного[š':] в русском языке, «Филологические науки», 1963, № 2, 137–142.

Isačenko A. V., Fonetika spisovnej ruštiny, Bratislava, 1947.

Касаткин Л. Л., Об условиях фонетических ассимилятивных изменений, «Исследования по фонологии», М., 1966, 55–64.

Martinet A., Économie des changements phonétiques, Berne, 1955. Мартине А., Принцип экономии в фонетических изменениях, М., 1960.

Neustupný J. V., 言語類型学と日本語音韻体系の分析, «音声の研究», 12集, 1966, 337–346.

Панов М. В., Русская фонетика, М., 1967.

Реформатский А. А., «Ж», «To honor Roman Jakobson», v. 2. The Hague, Paris, 1967, 1650–1656.

Sapir E., Language, A Harvest Book, New York.

城田俊, 無声・有声, 硬・軟の対応と [ʃʲtʲ], 北海道大学「外国語・外国文学研究」第17号, 昭和46年, 108–125

Trubetzkoy N. S., Grundzüge der Phonologie, 2. Auflage, Göttingen, 1958.

Трубецкой Н. С., Основы фонологии, М., 1960.

Шаумян С. К., Проблемы теоретических фонологии, М., 1962.

Шахматов А. А., Очерк современного русского литературного языка, М., 1941.

Jakobson R., Спорный вопрос древнерусского правописания (дѣжь, дѣжчѣ), Selected Writings I, The Hague, Paris, 1971, 247–253

Аванесов (a) は小論の論旨をまとめていた当時, 小平武氏によってモスクワからマイクロフィルムのかたちでもたらされたものです。お礼申し上げます。